

# 洛友会会報

京都市左京区吉田本町  
京都大学工学部  
電気工学科教室内  
洛友会

## 阪口忠雄教授の逝去を悼む

京都大学名誉教授工博  
大正6年卒業 松田長三郎



故阪口忠雄教授  
49年8月17日逝去

昭和49年8月17日、阪口教授が亡くなられてから早くも一ヶ月が経ちました。ご家族・関係者一同の祈願もむなしく、一同の限り無き哀愁のうちに、51年の貴とき生涯を終えられた。何とも痛恨悲愁の極みであります。同教授の輝やかしい業績については、別に記載されることと思えますので、私が京都大学在任中、担当してました講座（照明工学・応用電気工学・真空工学）のうち、主として照明工学等の担当教授としての阪口教授（応用電気工学等の担当は大

谷教授）について聊か記して限りない哀惜の衷情の一端を述べたいと思えます。ご在世當時のことどもを、あれこれと回想しますと、万感、胸に迫って執る筆先きも涙ににじみます。

私も齢、既に80を超え、まだ至つて元氣ではありますが、今迄いろいろの哀観を経験して来ました。国家や社会に関するもの、肉親・縁者・恩師知友・門下の人達など、様々な場合がありますが、学界における後継者の早世は、大きな心の傷手であり、深刻な痛恨事でありませぬ。大学教授としての最も重要な義務責任の一つは、立派な後継者の育成であると思えますが、優れた後継者が前任者の後を継ぎ、先師の道を踏み越えて、更に新しい学術技芸の道を切り開き創造して行くことによつて、学術は愈々進歩発展して行きます。大学教授は、その専門分野に

において、研究と教育において、学術文化の発展に寄与し、また次代を荷う若き学徒を教育する重大な任務が課せられています。この意味において阪口教授は、終始立派にその職責を全うして来られたと言えます。

昭和21年9月、京都大学卒業後、大学院を経て、講師・助教教授・教授と果進し、この間の28年間研究に教育に専念せられ、230篇に上るといわれる多数の論文・記述を発表して、斯界に貢献する所、甚だ大なるものがあつたことは、衆目の認むる所であります。

元来、わが国の大学で（これは外国でも同様であります）、照明工学を専攻する研究者は必ずしも多くはありません。この数少ないこの方面の研究者・指導者としての同教授を失つたことは、大学はもとより、学界・業界の大きな損失であり、誠に惜しみて余りある痛恨事であります。

世には逆さまを見るということが言われます。親が子を、夫が妻を失ふことなど、順当でない永別に遭遇することは、いづれも大きな悲愁であります。後事を托し、将来を期待した後継者に先き立られることは、言葉に尽せない悲しみであります。人生51、学者としても、人間としても、漸く円熟して、これから益々、大成してほし

いと大きな期待を寄せていただけに、今、忽然として、業半ばにして早逝されたことは、返す返すも遺憾の上も無いことで、学界の一大損失であるとともに、同教授の心中を想うとき、哀惜痛恨の情を禁ずることができません。

今後の学術技芸は一層広汎に、また深化して行きましょう。日目が技術革新の時代であり、次から次と、新分野が拓かれて行きます。阪口教授の研究業績を一瞥しても、照明工学・プラズマ・エネルギー変換・放電工学・物性等・非常に広汎な分野に亘つて、数多くの独創的・先駆的な研究を行い、いづれも斯界に大きな貢献を挙げて来ましたし、また照明学会・電気学会・日本学術振興会等における、各種の委員会の委員長や委員としても、大いに活躍され、殊に照明工学界に対しては、特に意を用い、若くして斯界の重鎮として重きをなして来られました。

去る昭和45年、大阪での万国博覧会における照明の基本計画、その実施等の中心的担当者として、同博覧会の照明は、内外の賞讃を博しましたし、また来年、沖繩で開催の海洋博覧会に対しても、学会を代表して、委員長として、その基本計画に参画するなど、照明関係の重要事件に対しては、常に学会から選ばれて、よくその責務を果さ

れた。今から思えば、大学内における研究・教育活動、また学外における学会・事業界における諸活動等同教授には、あまりにも多くの重荷が、かかりすぎていたのではないかと悔まれる。

同教授は、明晰な頭脳を以て、学術上・実際上の諸問題に取り組み、孜孜として倦まず、上記のような多数の輝やかしい研究業績を挙げられ、これらによつても、不言のうち、若き学徒にも、学問研究の厳しさ・楽しさを、身を以て指導されたことは、誠に尊いと云わねばなりません。前任者の私として、心から嬉しく思うとともに感謝している所でありませぬが、更に更に大成を期待していたのに、今忽然として長逝されたことは、天を仰いで長大息せざるを得ません。

君、人と為り、温厚誠実、責任感強く、どちらかと言えば寡言実行型の人でした。頼まれればいやと言えない性格で、さればこそ、各種の委員会を引き受け、また業界の指導をもされて来られた。勤厳寡言の人であつたから、型破りのエピソードは無かつたかと思えます。少々（？）アルコールには親しまれたが、酔えば陽気になり、例年、小宅で催うした歳末のパーティーなどでも、野球拳など愉しんでおられた様子が眼底に浮ぶ

のでありますが、今は居られない。ご在世當時を偲び、同教授のご冥福を祈るとともに、ご遺族の

### 故阪口忠雄教授の追憶

京大教授 大谷 泰之  
昭和十三年卒

ご多幸をお祈りして、限らない哀悼の微意を捧げる次第です。  
(合掌)

京大電気工学教室の阪口忠雄教授は去る八月十七日未明五十一才の若さで逝去された。今後ともに大学のため学会のため教育に研究に尽力されることを期待されていたにもかかわらず、遂に不帰の旅につかれたことは悔んでも悔みきれないものがある。とくに筆者にとつては阪口君は恩師松田長三郎先生の同じ門下生として、また最も親しい同僚の一人として、教育と研究に三十年近くの長年月苦楽をともし、また家庭的にもきわめて親しくしてきただけに、同君を失ったことに手足をもぎとられた以上の苦しさとしさを味つて居り、まことに痛惜に堪えない次第である。

顧みると同君は高槻市に生れ、茨木中学、三高を経て、昭和二十一年京大電気工学教室を卒業後、松田先生の指導のもとに大学院特別研究生として、放電灯についての研究に励まれ、二十五年に京大講師、次いで二十八年に助教職になられ、三十年には放電灯の起動

と再点灯に関する研究で学位を得られた。そして三十五年には工学研究所(現原子エネルギー研究所)教授に昇任、次いで電気第二教室の放電工学講座を担当、放電工学や照明工学その他の幅広い分野の研究と教育に当られ、多大の功績を挙げられた。  
また学外においては、照明学会関西支部長や副会長として学会の発展に尽くされた功績も大きく、すでに三十八年には照明学会賞を受賞されていた。また同学会本部や支部において合計十以上の委員会の委員長として活躍、とくに日本万国博や沖縄海洋博の照明施設研究委員会の主査や委員長としての業績其他多くの基礎分野と応用分野の功績も大きく評価されていたし、また本年度は同学会の新技術開発研究委員会委員長としての活躍が期待されていた。  
また照明関係以外の分野ではエネルギー変換、とくにプラズマを利用する直接発電分野ではMHD発電について多くの研究成果を取

められ、また工業技術の電子技術総合研究所流動研究員として四十一年以来MHD発電大形プロジェクトに参画して大きい寄与をされた。さらに光電物性関係ではレーザによる電離や半導体発光素子などの研究、その他電気材料関係では各種抵抗素子の研究など、放電工学、エネルギー変換および物性、材料などきわめて広範囲に亘る独創的先駆的な研究業績を挙げられた。そして生前のこれらの研究教育業績に対して先般従四位勲四等に叙せられ、旭日小綬章が授与されたことを申し添えたい。

阪口君の性格はその書かれた文字を見られて判るように几帳面そのものであった。また自らにも他人にもきわめて厳格であつて、いろいろな会合の席上での厳しい発言もよく知られていた。それにしても本年四月四日京都で開かれた照明学会全国大会において元氣な特別講演が開かれたし、懇親会には以前には好きであつたビールも飲めないのに長時間皆と楽しんでおられた姿が眼前に浮んでくる。

同君の趣味の一つであつたゴルフも筆者と同じく十数年前からはじめられ、随分アチオチのコースを一緒にラウンドして、いつも打数と冗談口を楽しんできたものだが、今はあの楽しいプレー振りも見られなくなった。

阪口君はご承知の通り眼は余りよくなかつたが、あれでいて照明施設のコンクールの審査をまめにやられたし、また写真の腕前も大したものであつた上色彩デザイン的にもすぐれた感覚をもつて居られた。

同君の人となりは厳しい半面やさしく世話好きな面も多く、また家庭ではよき父であつたことはよく知られていて、二人の令息の学校のPTA会長も度々引受けられ校舎建築などに献身的に努力されたことなど地域社会につくされた功績も数多い。

阪口君は三年前胃の手術をされたがその後大分元氣になられ、本年四月からは教室主任を引受けられ、以前から続いている臨時職員問題の紛争には何回も同交に出られるなど誠に氣の毒なまた申訳けないことの連続であつた。そして六月十六日から二ヶ月間の病氣欠席届を出され、大学のため学会のためまだまだ頑張りたい、早く回復したいと苦しい病と闘つて来られたが、遂に八月十六日の大文字の送り日を追うようにして十七

日未明他界された。翌十八日の告別式には九百人以上の方々方が遠方からまた近くから参列され、酷暑の中を長時間御見送り頂いた次第であつた。

最後に故人の長男敏彦君は慶応大学電気工学科四回生に、また次男泰彦君は京大金属工学科一回生にそれぞれ在学中で、とくに長男は半導体関係の卒業論文にとり組んでおり、卒業後は更に修士課程に進学の予定で、将来はお父さんの遺志を継いで照明工学関係分野で大いに頑張りたいとの決心を筆者も直接聞いていたが、このことはせめても故人の心の安らぎであらうと思つている。

なお阪口君の知友門下生の有志が相語り、生前の功績を讃え感謝の微意を表わしさらにご冥福をお祈りするため、阪口忠雄先生追悼事業会が発足し、追悼式の挙行(九月二十九日午後二時より於京大電気総合館)や追悼論文集の作成、遺族への奨学金の贈呈などの事業が計画されていることを附記して、ここに阪口君のご冥福を心から祈りつつ筆をおくことにする。

### 阪口忠雄先生を偲んで

京大助教 野口 透 (昭28新)  
昭和二十八年卒

三年前、胃潰瘍ということで手術を受けられた阪口先生は、その後の体調恢復が芳しくなくにも拘らず、大学においては教育・研究

活動を、学外においては学会活動や照明普及活動を熱心に続けておられた。昭和二十八年大学院入学以来、いつもお近くにいた門下生の一人として、先生の御健康を案じながらも、口出しする隙のないほどの御活躍であった。昨春秋、再び不調を洩らされるようになったが、会員の皆様の御存知のとおり、電気系教室は昨年末以来異常事態下であり、先生も不調を秘して問題解決に当って来られた。この春、「この異常事態下に、順番が来ている私がやらなかったら、他の先生方に迷惑がかかる。」と、御健康を気遣う周囲の先生方や研究室一同の願いを振切って、本年度の電気工学教室主任になられ、木嶋・板谷両主任と共に、五月の授業再開およびその後の職員有志らとのいわゆる団交に努力を重ねられた。六月に入ってから先生の御健康は悪化の一方で、食事後すぐに嘔吐された状態で団交に臨まれたことも再三であった。そして遂に六月半ばから自宅で静養されることになり、七月下旬には御入院、二カ月の病氣休暇予定期限を過ぎるこぼし四分で八月十七日午前零時十四分に永い眠りに就かれたのである。

先生の御戒名は「光雲院忠蒼理照居士」である。御岳父大政次郎氏の御希望で、照明工学に関連する文字がいくつか盛り込まれた。昭和四十五年の日本万国博や来年の沖繩国際海洋博の照明基本設計に中心的役割を果されたほか、学問および実際の両面でわが国照明界に記された足跡には偉大なものがある。一九七〇年代の照明は人間性尊重の照明でなければならぬというのが先生のお考えであった。当初は奇異に感じられた「人間尊重の照明」という言葉も、今ではわが国照明界に定着しつつある。これは従来機能中心の照明技術とは異なり、そこで活動し、休息する人間にとっての快適性を重視する考え方であった。「色を美しく見せる光源」とか「人の顔を好ましく見せる照明手法」などの研究に取組まれ、照明界に新しい息吹きを吹込まれた。先生は放電ランプの研究からスタートされただけに、プラズマ工学の分野でも業績を挙げられ、教室では放電工学講座を担当されていた。とくに高効率無公害の発電方式の一つであるMHD発電は先生の主要研究テーマの一つであり、工業技術院のMHD発電開発に関する大形プロジェクトには昭和四十一年の発足時から参画されると共に、電子技術総合研究所の非常勤研究員として、発電ダクトのシミュレーションの研究を続けて来られた。

このほか、発光ダイオードの分野でも、II-VI族化合物半導体の結晶作製から、その発光特性に至るまでの研究を進めておられた。七月の御入院の直前、「あと十年生きられたらなあ。」とおっしゃったと洩れ聞いている。今後おやりになりたいテーマを沢山抱えておられ、また私ども門下生も末永い御指導を期待していたのに、誠に残念でならない。研究指導の面では厳格な先生であったが、門下生には全人格的な交流を通じて多大の感化を与えられた。研究室のコンパでは飲み助の学生たちを相手に最後まで頑張っておられた往時の先生も、手術

後はワインを少量、それも先生流の凝りようで勉強されたワインに関する蘊蓄と共に、グラスを傾けておられた。二十年余り、公私に亙り親しくお教えを受けた者として、先生の想い出は尽きないが、余りにも急な御逝去の直後で、この一文もまとめ難い状態である。先生の御遺志を継ぎ、研究業績を挙げるのが、先生の御恩に報いることになる信じ、阪口研究室の遺されたスタッフ一同と共に努力中である。終りに、先生の御冥福と、御遺族の御多幸をお祈りする次第である。

り、吾吾後輩のゴルフ仲間では、この頃ひそかに「オールドパー」或は単に「パー」さんなるニックネームを奉って、かつはその御健康を祝し、かつは若干の怖れを表明しているのである。一五二才の長寿を保ったといわれる「オールドパー」については、後に若干記述することにして、ここでは本来の目的であらうゴルフ会に就ての報告を急ぐこととしよう。日取りは三月二十八日をとし、場所は小金井カンツリークラブ、参加人員九名と決定。所での日は、またどういうめぐり合せか、年度中掉尾の大雪、東都は珍らしく白皚皚の一色、こうなれば詮も早い、他日を期する外なしと、いっそ思い切つて先に延ばして、梅雨の初まる直前の六月六日ということにした。この日がまた合憎帽のうちには雨、幹事の山本三郎君氣を揉むこと頻り。しかし兎に角集合しよう、若し雨が止まねば、クラブでビールでも呑んで歓談しようというので、この辺は年の功、天気を相手にとつていつ考えても初まらぬと許り一同定刻に参集、しかし待てば海路の日和とやら、この度は幸段段と雨があがって、ちょいちょい靑空がのぞく程の幸運。集まる面々は、宮崎長老を初めとして、大正一四年組、一本松、橋本

### オールド パー ゴルフ会

大正十四年卒業 富 永和 郎

在京の京大電気工学出身者で、明治大正年間の卒業者の会があった。鶴友会と名付けられている。会員は現在では皆、輪七〇才以上で、年何回か会合が開かれる。年頭には必ず会合して新年を祝い、鳥養先生の御参加を戴くのが慣わしである。今年はたまたまゴルフ好きの連中の出席が多く、特に大正二年御出身の宮崎駒吉大先輩(元三菱電機社長)のお顔が見えたので、誰いうとなく、一度この

大先輩をかたいて同好の士が集まって、ゴルフ会を催そうという発議が出た。勿論異議のあるう筈はなく、春暖相催す頃ははかつて、有志相集い一日の清興を愉しむことに一決した。

ここでいささか註釈をつける。と、宮崎大先輩は輪八十路の半ばを越えらるるも、その元氣は壯者を凌ぐものがあり、週に一・二回は必ずプレーを欠かさず、時に応じて後進を叱咤激励される概があ

滝本、富永、協山。一五年組、石川、奥原、山本の計九人。いづれもグラントシニアと雖も、球歴二〇内至三〇年の猛者(?)ばかり。だからこれは断じて世に云う敬老会ではない。ここではんとはプレーの様子こそ書くべきだが、さして変わったこともなかった即ち「ニヒソノイエス」だったので、徒らに読者を悩ますことを止め、端折っていきなりプレー終了の午後四時に移ることにする。

ハウスの別席で小パーティー、互に戦績を語って意気大いに上る。さる程にかねてたくらんだ趣向に従い、一本松君より、スコッチ「オールドバー」一瓶を宮崎大先輩に贈呈、かくして長老はここに「オールドバー」として、名実共にクオリファイされたことになり、全会一致でこの会を「オールドバー」の会と命名、春秋二季に会合することとなった。

何?スコアだつて?野暮なことを聞きなさんな、「バー」さん位になるとスコアなんぞはおつけにならない、しかしワンラウンド一〇〇以内なることは確か、どうだ驚いたかという所ですか。

これから後は全くの余談だが、長寿を望まれる方には、筆者自らが云ってはちとおこがましいが、必読の文字である。スコッチを愛用する酒徒——い

や酒徒ならずとも「オールドバー」の名は、超長寿者をして夙に耳にされているに違いない。

THOMAS PARRこと通称OLD PARRはスコットランド人で、齢一五二年と九ヶ月生きた。一〇才を越えてから、若い婦女を手込めにして罪を得、牢屋に入れられたが屈せず、出獄後若い娘と結婚して二人の子供を儲けた。死後は王侯貴族並に国家に顕著な勲功のあった人士の葬られるウエストミンスター寺院に埋葬されている。スコッチ、オールドバーのなるま形の瓶(びん)のレッテルには、Grand Old Parrとするして、「バー」の晩年(?)の肖像が描かれているが、尚活力を失わぬ顔容と共に、その特長である顔を埋めん許りの長い豊かな半白の髭が、頬に初まつて顎から胸にかけて房房と描かれていゝ。そしてその下に、aged 152 とある。東洋流に云えば、この酒こそは不老長寿の秘薬という意味でもあろうか。味はやや甘口で丸味を帯びた舌触り、その芳醇な香気と共に「オールドバー」の名を辱しめぬ名酒である。

長寿と云えば、この頃聴いた笹本医博の、Old boys be ambitiousなる口演の一端を紹介したい。先生は慶応医学部の教授で、成人医学の権威、目

下東海大学の附属大病院を建設計画中ときく。

中国では古来八〇才を傘寿(さんじゆ)と称し、八一才を以て齡半ばとして半寿の祝をする。これは医学上根拠のないことではなく、人間は發育末期の五倍迄は生きられる筈、即ち二五才の五倍として一二五才迄。それがそういかないのは、毎日の生活で命を縮めているのだ。例えばたばこ、たばこ一本吸う度に一四分三〇秒寿命が縮まるといふデータがある。米国ではベルトの穴一つずらすだけ肥れば、寿命が一年短縮されるといふ有名な言葉がある。

### 電話交換技術と電話サービス

大阪大学教授 昭和九年卒業 喜田村善一



現今の日本人の平均寿命は、男七〇才、女七四才、つまり七〇才を過ぎた女は皆未亡人になるといふこと、冗談はさて置き、寿命の伸びは近年驚くべきものがある。「明治は」でなく、「限途は遠くなりにけり」といふことであろう。「ビクトル・ユゴー」は、四〇才は、青春時代の青春、六〇才は老年の青春と云った。さればオールドボーイスビーアンピジャス。という次第で、このオールドボーイゴルフ会も、まだスタートした許との若若しさで、年々歳歳いよいよ快適なゴルフを愉しむこと、期して待つべきものがある。

会員の皆様に、今さら電話交換技術の歴史をあらためて申し上げるまでもないとは思いますが、日頃の研究を通じて考えてきたことの一部を述べてご参考供したい。いうまでもなく、電話の誕生

(一八七六)の直後から、一群の電話機のなから任意の相手を自由に選んで通話を可能にする方法、つまり、電話交換の技術の要請が生じた。これを効率よく実現する方法は、一群の電話機の重心にあたる位置に、加入者からの電話線(加入者線)を集中し、その端子間を結ぶ接続回路網をおくことである。さらに、加入者数が増えれば、集中点(交換局)を複数個おき、その間の任意の接続を許す局間中継線をおくという方法

で、しだいに電話網を拡大することになる。電話交換の初期には、いわゆる手動交換が行なわれたことはご承知のとおりで、加入者線と中継線が、ジャックを端末として盤面に配置され、両端にプラグのついたコードを要求された位置に挿し込んで、相互接続を行なう接続回路網があり、これを制御するのが交換機であった。つまり、通話を要求を検知し、接続先を開きとり、接続先の空を確認して通話を完成するという制御機能が、通話網と完全に離されていることになる。現今の観点からみると、この制御方式は極めてすぐれた能力をもつもので、人間というすぐれたプロセッサをもつ共通制御方式であるために、情報の伝達人間の自然言語で行なわれたし、プロセッサの利用形態としても、オンラインリアルタイムの時分割方式が採られたことになる。ときには、プロセッサ(交換機)のもつファイルの情報を利用することさえできたことも付け加えておいてよい。当今、ダイアリンという方式が大会社などで採用され、個人の電話番号を知らなければ、必要な相手を探し出せないというサービスが行なわれている。気のきいた交換機が丁寧な挨拶とともに要件を聞き、適切に処理してくれた

良き時代をいやでも思い出される方も多いかと思う。

このような融通のきかない、必ず相手の電話番号を発信者が承知していなければならないという負担が生じたのは、自動交換方式が導入されて以来であり、今日なおその事情に変わりはない。

いかに人間がすぐれたプロセスサであろうと、その処理能力は限られているから、電話網の拡大とともに自動化が要求され、いわゆる段々式交換機が世界的に発展した。わが国でも、関東大震災（一九二三）によって、京浜地区の手動局が破壊されたことを契機とし、ストロージャ（A形）、ジメンス（H形）の両形式が導入された。

この形式の交換機は、いわゆる上昇回転スイッチを主要な構成要素としている。制御方式上からみれば、このスイッチの特質として、制御機能が通路路構成機能と一体となっていることが特色であり、ダイヤルパルスそのものが順次通路路を見出す制御に用いられる、いわゆる、直接制御と呼ばれる方式で制御されねばならなかった。

加入者からみれば、交換機の制御方式そのものにどんな方式がとられようと関係がないといつてよいが、この直接制御方式は、市外

交換などをふくむ場合に必要な四線交換機能、通信網構成上の自由さなどに、運用者側として大きな技術的問題があった。したがって、ダイヤルパルスに直接制御されない、多線の同時接続が可能な交換機という条件をみたす交換機が要求されるようになった。

一九五二年、日本電信電話公社の発足とともに、全国ダイヤル即時化のための新交換機の選定が始められ、同五三年には、クロスバ交換機が選定された。この方式は、マトリクス状に接点群が配置され、水平、垂直線を指定してその交点にある接点群を動作させて接続を行なうものであるから、スイッチそのものに制御能力はなく、外部から選択信号を与える機能を独立に設ける、いわゆる、共通制御方式をとることになる。この交換機を契機として、再び、制御方式上は、通路路と制御部が独立した方式、つまり、手動交換に類似した機能的分割をもつ方式が交換機的主流として返り咲くことになった。

しかし、クロスバ交換機では、スイッチはもちろん制御装置も電磁継電器（ワイヤスプリング継電器）を主体とする電磁機械式のものであったが、一方、その当時には、戦時下に発達したレーダ、計測などのパルス技術を背景に、す

べて電子的なスイッチ類を用いた交換機の実現が夢ではなくなっていた。ちなみに、このような思想にもとづく交換機は、すでに一九三九年ごろから、通信省工務局を中心に試作され、通路路にサイラトロンを用いた交換機があったが、惜しくも戦火によって中断した経緯がある。

私の研究室では全電子式交換、すなわち、通路路も制御部もすべて電子的な部品で構成された交換機を夢みて、一九四九ごろから研究を開始し、通路路に用いる放電管の試作から始め、種々の労苦のすえ簡単なモデル交換機にまでこぎつけた。一九五〇年代に入ると、トランジスタが入手できるようになり、そのスイッチ素子としての特性がすぐれていることに着目し、トランジスタ式の全電子交換機の試作に成功したのが、一九五七年のことである。この研究の開始の頃には、トランジスタは壊れ易い、極めて高価な素子であった。当時、一般用のごく普通のトランジスタが六千円もしたことを今でも記憶している。

このような努力がきっかけとなって、東京大学、電々公社通研、各交換機製造会社などでも、各種の研究と試作が開始され、五〇年代はまさに試作交換機の時代であったことをなつかしく思い出す。

その後、種々の経緯はあったが、結局、ベル電話研究所が試作し、一九六〇年に試運転を開始した。No.1 ESS方式がわが国の方式にも強い影響を与えた。この交換機は、通路路は機械的接点（フエリッド）を用いてはいたが、制御部としては、完全な蓄積プログラム制御の処理装置を用いる点に特色があった。この段階から、かつての交換手にかわって、コンピュータが制御の責任をもつという電子交換の形式が定着し始める。わが国でも、現用されているC-12形交換機などがこの方式に属し、今後かなり大量に全国各地に導入されることになっている。

しかし、量的な処理能力はともかく、質的な能力からみれば、現在のプロセスサは交換手の機能にはるかに及ばないことは申し上げるまでもない。現在、短縮ダイヤル、キャンペーン（相手が話中の場合、通話終了をまつて接続する）、いつせい指令、割込み着信、着信転送などの新サービス機能が

予定され、一部はすでに実施されているが、なお有能な交換手の機能にはほど遠い。

現在でも、人工智能の実現については、楽観論と悲観論が相半ばし、両論者は、用語法まで異なるという皮肉な発言もある。それによると、プロセスサなどの形容を擬人的な用語をもってする人は、楽観論者である、という。小文では、交換手とプロセスサを対比させて話をすすめたが、筆者自身は決して楽観論に積極的にくみするものではないし、一つの夢を画いたにすぎない。

ただし、当世の人手不足によって、自動化されるものが続々と現われているが、現状ではいくらでも利用者に負担をしわよせする形式のものが多くが実情ではなかるうか。対話がなく相手を自己の思想に従うことを止むなくさせるのみという、自動機械に恨みを抱く人も多い。当世、電子交換にも、もういちど夢を抱いてみたいと思うこのごろである。

### 雑 文

（仰）日本ビジネスコンサルタント  
代表取締役  
昭和八年卒業

久 保 久 雄

（一）洛友会の会報に何か書いて欲しい、と本部よりの要請を理由に、東京支部長高木正氏から頼ま

れた。正直な所、それ迄朗らかな気分が居れたのに、途端に圧迫感でストレスがかり始めた。何故

こんな事になるのかと考えて見た。私のように文筆に自信のない者が、何でもいからと言われても、確かに面倒な事であり、誰もが喜んで引受けないのは事実である。手数を惜しむものではないが、雑文でも一つの論旨というか、話の中心というかが存在しなければならぬ。結果として、諸兄に対して、あいつはこの位の事しか知らないのか、書けないのかと云う姿を暴露することになる。そうすると所謂「恥」をかくという事と相成る。「文章」を書くのではなく「恥」をかくとなると憂鬱になるといふのは無理もないと考えられる。それでも、本部と支部と両方からの要望では責任もある。その事に考え及んで書いて見る仕儀とは相成った。勿論面白いものでもないし、為になるものでもない。本当の紙面ふさぎをさせて貰うので、誠に以て申し訳ない。

(一) 小生昭和8に学窓を巣立って、日立製作所に奉職し、茨城県での工場生活約20年、それから本社に転じて勤めること約10年、ここから日立の系列会社に移って、日立電子(株)で奮闘すること約10年。現在は題記の肩書きのような仕事に従事している。(株)日本ビジネスコンサルタント(NBC)と言っても、例えば学校の教授、研究所の

所員、電力会社勤務とかメーカー勤めというように、馳げても何をしているかとお察し願えないような職種である。そこで会社の紹介でもさせて戴いて、皆さんに御承知願うことにしたい。従って自分の会社の宣伝とまでは行かなくとも、その臭いは多分にある。会報のような公器にそんなことを持ち込むのは、甚だ忸怩なるものがあるが、そういう業種が近年存在しているのかという程度に御存知戴くのも強ち無駄とも言切れぬように考えたので——これも多分に勝手な解釈だが——敢てお許しを願う次第である。

(二) 我がNBCは時代の寵児(?)とも言われる所謂情報産業の一つに属する情報処理サービス業である。簡単に言えば、電子計算機を利用して、顧客である官公庁、研究所、金融機関、製造業、販売業等あらゆる方面からの委託を受けて、データを収集、整理、蓄積、加工して結果を納入するサービス業なのである。NBCは昭和34年に創立され、現在は北から数えて秋田、青森、東京、名古屋、北陸(金沢)、大阪、神戸、岡山、福山、山陰(松江)、広島、山口、福岡に合計13の電子計算センターを持っている。現在約一、五〇〇名の従業員を擁し、入出力用消耗品や作業用磁気製品の販売を含めて、月

商約10億円の仕事をしている会社である。ついでに、ここで我が国全体の計算センターの概要を述べてみると、日本電子計算機(JECC)——これは通産省の肝入りで、我が国の電子計算機製造及び開発を資金的に援助するために設立され、所謂電算機六社、日立、富士通、日電、東芝、三菱、沖の各電子計算機メーカーの製造した機械を買上げ、之を日本のユーザーにレンタル制度で貸付けを行っている機関——が昭和49・1・1付けで取り纏めた計算センター及びソフトウェア・ハウスの数は、一、独立計算受託企業56社、センター数687事業場

二、公共機関24社、25事業場  
三、メーカー及び関係販売会社51社、158事業場  
合計 641社、870事業場  
となつて居り、昭和48年度の一年間の売上高合計は、一部推定を含んで約一、三〇〇億円程度の規模である。先述したように、時代の寵児の情報処理サービス業も、総需要の大きさに較べて同業者が多数存在し、厳しいマーケットとなっている。唯総需要が、年々約20%の割合いで増加が続いて居るに對処するために、各事業所とも、技術力の向上、蓄積、電子計算機のグレード・アップ等を図り準備おさおさ怠りないというのが

現状である。  
四 もう一つ、ついでに申上げて置きたいのは、我が国全体では一体コンピュータはどの位稼働しているかという事であるが、昭和48・9・末で、汎用電子計算機の実働総数は約二〇、一〇〇セットであり、これはアメリカに次いで世界第二位に当る。内訳を見ると、金額比で国産機対外国機比は53対47、そのうち大型機は国産機対外国機比は41対59と外国機が優勢、超小型機では50対50と伯仲し、中型機は国産機が71%、小型機で72%を占めて居り、コンピュータ界

昨年十月から当電気通信協会では技術英文作成力の向上を目的として一年間の通信教育を開始したが、研究者や技術者の企業内訓練に関心のある方々から、語学力養成に関する基本的な考え方や方法について、御自身の経験や見識をもとにした御批判を伺いたいと思つて投稿させて頂いた。  
一、技術英文とは何か  
技術英文とは論文・資料・報告・勸告書・解説書・仕様書・特許明細書・操作手順書・カタログなどに用ゐる英文をいう。科学や技

の世界の雄たるIBMは全世界で約65乃至70%を占めている事に比べて国産機は今の所、我が国ではIBMに押え込まれていないのである。しかし昭和50・12月からはコンピュータ・ハードウェアの資本自由化100%が実現し、昭和51・4月からは同じくソフトも自由化100%と定まっている。これに對し我が国は、日本人の英知と勤勉とで、世界的に角逐を争っている。これからの情報産業の進歩に貢献して行くべきであると考えているのである。  
(昭和49・8・3記)

術に関する内容なので、文章には文学的な美しさや味わいの深さは求められないかわりに、明確さ・簡潔さ・理解し易さがまず第一に要求される。  
二、何故英文の質が大切なのか  
理工学に関する実用英文などは意味さえ通ずればよいと考える人々が圧倒的に多い。だが、意味を明確に通じさせるだけでも実際は容易なことではない。また、その文章自体の理解に努力がいるものや、ぎこちないものなど、情報の氾濫している今日読者が読んでく

### 技術英文作成能力の訓練について

電気通信協会常務理事  
昭和十三年 卒 平野 進

れるはずがない。日本の科学や技術が一応世界の一流水準に達した現在、相手は一流の企業や研究技術者である。英文の質が悪ければ実務や情報交換の上で物心ともに大きな損害を我々は甘受しなればならない。

それだけではなく国際的な協力があらゆる面で必要とせられてい

るのに、語られたり書かれたりする技術英文の質がわるいと、如何に誠意があつても日本人として具体的な協力を参加することが困難だ。実用文でさえも満足にかけないのに、どうして社会的文化的な基盤をこにすると他国民との間で微妙な理解を深めるための会話などできようか。

なお日本語からフランス語やスペイン語などへの翻訳の要望もふえてきたが日本語から英語への翻訳がしつかりしていれば英語からフランス語やスペイン語などへの翻訳は欧米人に依頼すれば非常に容易に実行できる。

三、開設のねらい

世界の人々にすんなりと読んでもらえる英文作成力を受講者につけてもらうこと(具体的には英語の発想法になじみ、平易な言葉を適切に使って、まともな文章を書く力を短い時間でつけていただくこと)。

四、対象と到達をめぐる環境

受講者は大卒程度の基礎学力を有し電子通信(勿論データ通信、電算機を含む)とその関連分野に働いている電子通信技術者・研究者(または語学の素養と高校卒業程度の理工学的教養があつて技術文翻訳に当っている人)。

この人々は「日常業務上外国人と接触したり、英文で論文をかいたり資料をつくる機会が非常に増えている。しかし語学勉強にさきうる時間は乏しいので、如何に能率的に勉強するか悩んでいる。英文を読めば専門分野のことならば英文自体として九五%はまず理解できるが、さて自分が書こうと筆をとると全く分らぬことはかりだ。相談する相手も身近には得られないし適当な和英の辞書も見当たらない。」という風な環境におられると見てもよからう。

五、講座の設計

(一) テキスト

通信講座にテキストはつきものになっていくが、一年間十二回で一通りのコースを完了する目的に適したテキストを作ることは至難のわざである。そこでハンドブック代りに私がまとめた「技術英文のすべて」丸善A一五、五八一頁を使って貰うこととし、テキスト作りは考えないことにした。

(1) 日本語の表現力解釈能力をたかめる。

(2) 論理的表現力を養う。

(3) 英語式発想法を養うことに重点をおくためできるだけ限り日本人の発想法に近い形で出題する。しかし多義に解釈されることのないよう細心の注意を払う。

(4) 文章を構成し作文する能力をたかめる。

(5) 言葉に対する感覚を育て、やさしい言葉を使いこなせるようになる。

(6) 技術的な内容は、出来るだけ各分野にわたりあまり特定の専門分野に偏らぬようにする。電子通信技術者ならば当然心得ていなければならないような知識の範囲を越えない。

(7) 四八年度は仕様書・カタログ文・手紙・法律文・特許明細書等は取り扱わない。

(8) 毎月八時間以上の負担を受講者につけない。

六、出題の種類

六・一 和文添削、和文解釈とその英訳

私が今まで接してきた限りでは、和文そのものがまともに書かれていない原稿は非常に少ない。和文の原稿そのものが三〇%は著しく悪い(英訳する価値がない?)。

四〇% 当ますずい。つまり計七〇%はそのまま訳すことをためらう程度のものである。英訳のため原稿として本当に磨かれているものは五%にも及ばない。まとも

に書くの意味には二つあって、第一は、目的とする読者に何をどのように伝え、どのような効果を期待するかという基本をしっかりと覚えて論文なり資料なりを書くこととであり、第二は、執筆の目的を達するためには特定の場所の定められた長さの文章をどのように構成しどのような言葉で綴るか(明確一義的で美しく親しみやすいこと)という見地からみてその個々の文章が適当適切であることである。

第一の条件を取り扱うことは本通信講座の範囲外であるが、第二の条件は取り上げるに足りるとの考えから和文の添削と解釈をこの講座の重要な構成部分とした。

第二の条件を満たすことを要求する出題において、文章は、実務的なものに限る文学的要素を含めないことにした。答案は、日本人の常識から考えてまず普通の文章であれば十分であるとしている。

これに対し和文解釈とその解釈の和文表現(ならびに関連英訳)の方は徹底的に明確一義的であることを要求する。つまり英訳に当たって何の疑義も残さぬものでなくてはならない。

六・二 短い文や句の英訳

前置詞の用法・*from* や *collon* の習得・定量的表現・主語の選択など文章構成の基本的要素の取扱いの練習である。

六・三 図・写真・表の説明

写真・表などに簡潔な caption をつけたりすっきりした表をつくることは簡単なようで案外難しい。また文章で図の特長をのべたり、意味するところを説明することも練習しておく必要がある。

六・四 思想や概念の正確な叙述

高校乃至教養学部一年程度の数学・物理・化学などについて、思想や概念の正確な叙述能力をたかめる問題を出した。法律文や契約文などもこの目的に適するが、これらには独特の言いまわしがあるので現段階では避けることにした。

(注一) 和文解釈の問題を作つてぶつかった問題に句読点用法がある。英語では句読点には *period* (full stop), *comma*, *semicolon*, *colon* の別があり、それぞれ使用

はならない。一部の受講者からはクイズのようだと批判もあつたが代表的な多義の文章について注意深く意義をさぐる問題を相当数用意した。この多義の文章を英訳しわけけることは句読点の用法、副詞の配置、助動詞の使用法などの練習に役立つ。

法をかたりはつきりしているが、和文では「。」と「、」の二種類だけであり、しかも句読点用法の文法がない。私は論理的な表現をするために句読点用法の文法がないことを遺憾とし新聞に投書したり国語審議会にも働きかけてみたが今日までのところ何の反響もない。どの言葉が何を修飾するのか不明確な和文ではさまざまな解釈を万人にわかるように表現することだけでも細心の注意が必要である。

「また私はパリへ行きたくなった」の文は下のように書きなおせば何が何を修飾するかが明らかになる。

私は またパリへ 行きたくなつた。(かつてパリへ行つたことがある)

私は パリへ また行きたくなつた。(かつてパリへ行つたことがあるバリへは一度も行ったことはない)

この際句読点はいないが分ちがきをすることで意味を明らかにしている。

文意を明確にするために必要に応じて分ちがきのほか中点や( ) 「」などをを用いることにした。

六・五 電子通信関係  
これが本講座の中心となる問題である。方式に関する問題を比較

的に多く出した。

六・六 英文添削

発想法の差異と論理的構成の二点をのぞけば和文でも英文でも基本はあまり変わらないのだが、論理的でまともな文章かどうかや言葉の用法の適否を感じ分ける能力を養う目的の出題をした。

発想法に関するものは一般の英文で機会あることに取り扱うことにした。

なお技術的な思考も含めての英文添削は八回以後で取り扱うことにした。

六・七 その他

基本的な練習を終えた後は抄録のつくり方、要約のしかた等を出題し、最後の段階では特に論文や技術資料などの文体にとらわれない自由な英作文のしかたを出題した。

七、問題作成の方法

(1) 日本人がよい英文をつくることとは必ずしも容易とは限らないので、文章表現についても信用のおける学術雑誌、PR誌、教科書などをを選び、これから適当な部分を訳出する。勿論前後の関係から、必要があればこれを補いあるいは一部を切捨てる。Copyrightの処理が必要である。

(2) この際何をねらって出題するかを確認しておく。またどの部分に注釈をつけるか検討しておく。

く。

(3) その訳出された内容を全く日

本人の発想法にしたがって書きなおす。つまり直訳すれば必ず英語らしくない文章が出来上がるように変形する。これを問題として出題する。

(4) 誤りや不正確な点や多義に解釈できる点がないかを英文と和文について詳しく検討する(英文そのものについて技術的あるいは語学的に不十分な不適切な点がいちい発見されたのは意外であった。また著名な学者や実務専門家監修となっている本の和訳でひどい誤訳のあるものもあった)。

(注2) Bell System Technical Journal、Bell Laboratory Record

を比べると、後者は文筆の専門家がかいているだけに文章は前者より格段と立派だが稀には技術的な小さな誤りが入っている。

八、模範解答の作成

(1) 差支えない限り問題作成につかた英文を模範解答とした。

(2) 問題作成時に検討しておいた点、すなわち、発想として英語的な点(なぜそのような表現法をとるのか)、誤りやすい点、迷う点、句読点の用法、助動詞のもっているニュアンスなどについてできる限り親切な注をつけた。これは質問してきた受講者にもみ答えるのでは他の受講者に不親切だと考

たからである。

(3) 受講者として一番関心のある

事柄であろうと思われる synonym (同意語) について、使用可能な範囲はこれこれだと示す努力をしたが成功したとはいえない。例えば表わすは express, show, represent, give, indicate, describe, denote, signify, etc. のうちどれを使うことが一番適切かを判断してさらにこれこれ(このような理由で)使用可、これは使用不可、というふうな注をつけることは容易ではない。適切な用例をそえて説明することがむずかしい。

英語の文献をしらべても著者が orthodox な表現を必ずしているかどうかを確認できるとは限らない。

(4) 模範答案を作っているといろいろな疑問が限りなく浮かんでくる。例えば、変数  $x$  の定義域が between 3 and 15 とあるとき  $3$  と  $15$  を含むかどうか、関数  $f(x)$  が連続なのを  $\lim_{x \rightarrow 15} f(x) = f(15)$  と書くが同様に  $\lim_{x \rightarrow 20} f(x)$  とかけるかどうか、lower something というとき基準になっている物や人 something の相対位置に関して使用上の制限はないのかなど(答: 3と15を含む、 $x=20$ 、使用上の制限なし)。

九、出題と模範解答の具体例

(一) 和訳

A、速度  $U$  と  $V$  の時間的変化率  
velocity  $U$  and change is  $V$   
per unit time

I、速度  $U$  と量  $V$  の時間的変化率  
derivatives of velocities  $U$  and  $V$  with respect to time

ウ、速度  $U$  と量  $V$  の経時変化  
variation of velocity  $U$  and quantity  $V$  with time

エ、速度  $U$  と  $V$  の経時変化  
variation of velocities  $U$  and  $V$  with time

(二) 短い文や句  
直流24Vで動作する。  
モードIIで発振する。

解答  
to operate on D. C. at 24V  
[on 24V D. C.] to oscillate in Mode II

(三) 和文英訳  
標準形クロススイッチの基本  
的再設計についてかすかすの提案  
がなされたが、最近までい  
ずれも受け入れられるところとは  
ななかった。

解答  
Although several proposals to effect<sup>1)</sup> a<sup>2)</sup> basic redesign of the standard crossbar switch were made, until recently<sup>3)</sup>, none was<sup>4)</sup> found<sup>5)</sup> acceptable.

(1) 提案は「基本的再設計をもたらし」意図のものであるはずである。  
to make a basic redesign for

redesign する方針がすでにきまっていることになり全然意味が変わってしまふ。

(2) a proposal to effect a basic redesign を複数化したものが proposals to effect a basic redesign である。勿論 the basic redesign としてはならない。この「は」ともいうべきもの「の」の気持。

(3) 文法的には変な形だが、普通このようにいう。

(4) were でもよい。(テキスト三八頁上段参照)。

(5) 多くの日本人は found を挿入することに気がつかないが、これによって「検討した結果受け入れるに値するものではなかった」の気持がよく出る。

(四) 英文添削

In ancient Greece there were two cities of great importance. They were Athens and Sparta. The distance between them was not great. Their municipalities differed greatly.

解答

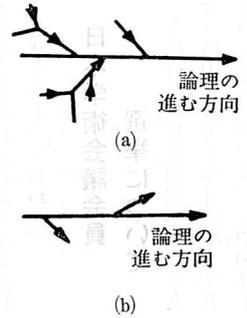
In ancient Greece, Athens and Sparta were two great cities of importance. Their governments differed greatly though the distance between them was not great. 原文は「きまられた文のよせ集めである。」

(1) 都市国家をつくっていたの

であるから governments に改めなくてはならない。(2) 前に gradly があるので great をさけたくなるが far は distance となじまない。また a [the] long distance というのが the distance is long ともしわなない。

一〇、改良計画  
十月にはじまる昭和四九年度の講座では次の点を改良したいと考えている。

- (1) 翻訳原稿は日本人向けにかかれていたことが圧倒的に多い。



これを処理する能力を養うことも必要である。そこで日本語としては一応特別の欠点のない文章をもとに、構成を変えて(全体の論理の構成展開を図(a)のような形式ではなく図(b)のようにすると同時に、主要なことをまず前におき、一次近似で要点をのべ、その後次第に補足して近似度をたかめる。適当な主語の選択は勿

論不可欠である。英訳をすることを求めるような出題を加えた。

(2) 英文を正確に訳し最も適当な日本語で表現する能力は、英作文能力向上にそのまま通ずるので英文和訳をも出題する。当然すといえども遠からず式の訳をすることはたやすいが、正確に意味をつかむことはむずかしい。

アメリカ雑感

日立製作所旭工場  
昭和三七年卒 内田 頼 利

中部支部総会に初めて出席したら、その席上で何か書けと命ぜられ、思いつくままに、今年一月十三日から三月二十日まで滞在した San Francisco Bay Area の生活と約十年ほど前に九ヶ月程滞在した West Palm Beach (Florida) の生活から United States of America という国についての印象をまとめてみました。  
偉大なアメリカと悩めるアメリカ  
一九六五年のアメリカは正に偉大なアメリカでした。アメリカの夢は宇宙へ宇宙へと伸びていた時代だったようです。私が勤務していた RCA の Palm Beach Gard-

十 給 び

企業内訓練は、具体的な要求に基き諸種の事情を考えて最善と思われる方法がとられる。従って英作文成能力を組織的に高めるのも工夫がこらされて色々の方々がとられているのに違いない。ここに記したものは私のまずしい経験から編み出した一方法にすぎないが、ご批判なりご感想なりを承ることができれば幸甚である。

スタンドで一時間乃至二時間の間行列をつくって待つのです。アメリカ人の多くは、もう大きい車は無意味になったと云って、日本製のカロラ、イタリア製のアルファ Romeo、フォードのピントに喜んで乗るようになっていきます。それから、バスに乗る人がふえてきたことです。十年前は田舎でバスに乗る人はよほどの貧乏人か、旅行者か、黒人でした。子供達も車に乗れなくて歩いて学校へ通ったり、バスを待っていたり、やはり、エネルギー危機になると女の人と子供達が一番痛手をうけるのだなあという感じでした。  
ところが実は、油はアメリカ国内にあふれていたのです。当時のタイムの記事によりますと、アメリカ政府は国内オイル価格を低い水準に抑えていたので、石油業者が売らないでいるだけで、油を積んだ貨車がアメリカ国内にゴロゴロしているというのです。それでも処理しきれなくて、古い油井にもう一度石油をもどしていたそうです。事実、私が帰ってしばらくすると、どこからともなくオイルが一杯出てきて制限は全く解除されましたが、価格は昔の約二倍程度にはねあがっていました。それから凶悪な事件が San Francisco Bay Area という狭い地域でも毎週のように起っていたこと

です。ヒッチハイクの娘さんが強姦されて殺されたとか、警官がただ逃げただけの黒人を射殺したとか、例の SLA のバトリシア・ハーストとかです。またニクソンのウォーターゲート事件は最も悩めるアメリカを象徴する事件です。けれども、この事件に対しては一般民衆は比較的冷静であり、国会がきびしく大統領を追求しており、アメリカの良識の健全さを感じ知らされる気がします。

2、生活水準

生活水準は所得と物価できめられると思います。一九六五年と一九七四年のアメリカと日本の所得および物価を比較してみますと、私の感じでは次の表のようになりまし。所得は私のつきあったエンジニアからの情報、物価はレストランの食事とスーパーマーケットでの買物から感覚的に設定したもので科学的統計的な根拠は全くありません。

国別	1965		1975	
	所得	物価	所得	物価
アメリカ	1	1	2	1.5
日本	1/4	1/2	1	1.5~2.0

一九六五年から一九七五年までに

今かりに物価に対する所得の比を以て生活水準指数と考えますと

アメリカの方がむしろ向上していることになり。物価は主として食料品ですからこういう結果になったようですが、ガソリンとか食料品とかの生活基礎物質が安いことは、やはりアメリカの国力の豊かさをしめじみと感ぜさせられました。名目所得の上昇と、工業生産物の量的拡大から経済大国などといって喜んでいたら恥しいことです。工業技術についても同じようなことが云えるような気がしてなりません。(おわり)

日本學術会議會員

選挙について

今秋行なわれる標記選挙に洛友会々員中、阪大工学部電子工学教室の喜田村善一教授(昭和九年卒)が、全国区第五部から電気三学会その他各方面からの推薦により、立候補されているのでお知らせします。なお有権者は棄権せぬように願います。

編集後記

○秋冷の好時節となりました。今年の夏は電気教室に不幸な事件が続ぎ、八月十七日に阪口忠雄教授が逝去され、此の原稿を書いて居る九月四日に、近藤文治工学部長夫人が急逝されると言う悲しむべき訃報に接しました。殊に現職の逝去は、教

室にとつては突発的不幸であります。その追悼号を、松田先生及び大谷先生、野口先生に御願いしました。

○本号には各方面の方々より御寄稿頂き、賑やかな記事となりました。元安川電機(株)副社長の富永和郎先輩より、ゴルフ随筆を送って頂きました。同氏は此の外に「バンカーなんぞ恐くない」と題する本を出版し、洛友会に御寄贈下さいましたので、関西洛友会のゴルフの大家三菱電機の山泉敏夫氏に転送し、同好の士に読んで頂く様御願いしました。前に大阪大学の喜多村教授より面白いゴルフ談義を本誌上で承りましたが、東西の同好の士の友好のチャンスになれば幸甚に存じます。本号には御投稿の方が多く、一部次号に繰り延べすることにしました。悪しからず御諒承下さい。

○名簿や会報に就て、二、三の会員より左記の様なアドバイスを頂きました。その御好意を謝すると共に、同様の御意見の方も可成多いと思うので、現況及び幹事の私見を述べ答弁に代えます。

一、名簿を毎年印刷することを止め、三年或いは五年に一回全印刷を行う。その理由は紙源の節約、印刷費の縮減で修正分や

新卒者は別に印刷すればよい。従来、毎年名簿を印刷する最大の理由は、広告料が本部の赤字補填と共に、東京及び関西支部の行事の有力な財源になって居り、これを取り扱う幹事の方々には並々ならぬ御苦勞をかけて参りました。又、広告をのせる賛助会員の各社及び、それに関連する有力先輩の方々の御援助により、経済的難関を切り抜けて参りました。又、東京及び関西支部で家族旅行(バストリップ)を毎年行つて居り、家族を含め親睦には非常に好評で、

大多数の会員に喜ばれて居ます。若し名簿を三年或いは五年に一回とすれば、此等の行事は一切中止の止む無きに到るでしょう。此の様な事情がありますので、今後各方面の御意見を聞き、充分検討した上で役員会に諮り度いと考えますので御諒承下さい

二、会報の片すみに「私の随筆」式の一欄を設け、会員の意見交換の場とする。

此の御提案は誠に結構で早速実行致しますから、会員各位より短信でもよい御投稿下さい。会員の中には、会報は送つてくれるなど言う方もあります。調べて見ると大体若い年層で、会費は払って居ない。むしろ洛

友会なるものは、迷惑であると云う様な方もある。

会報は昭和二十八年に第一号を発刊し、今回で第八十七号になる。此の様な何等の強制力のないものを永続させる為には、若い、はつらつとした会員が中心となるべきで、便宜上、現在、応用科学研究所に事務局をおいてやつて居る。同窓会の一身分近かなものは同クラスの者で、これ等の集合が洛友会を形成するのであるから、会を活かすのも殺すのも、各年代の方々の熱心さによるもので、事務局は忠実に御要望事項を実施し、或いは伝達するのが役目である。創刊時代の故山村忠行幹事も、会費の払込と原稿募集に苦勞して居ることが記録せられて居るが、現在でも同じ悩みをかかえている。

三、ミスプリントが多い。このことと就て、厳しい責任追究の手紙を買った。これは全く事務局の責任で、今後充分注意するとしか申し上げ様がない。若し名簿に誤記を発見されたら、本人或いは同期の方から知らして頂き度い。住所不明で郵便局より返送してくる会員も相当数に上り、宛先を調べるのに苦勞して居る。各位の御協力を御願います。

(幹事山本記)